資料

マカロックの『経済学史』(3) 完

相見志郎

目次

第一節 『国富論』の発行にいたるまでの経済学の起源と進歩（前号及び前々号）
第二節 『国富論の』発行――その著作の主な功績と欠点
第三節 『国富論』の発行以後における経済学の進歩

第二節 『国富論』の発行――その著作の主な功績と欠点

一七七六年に、わが国の名高い人、アダム・スミスは、『国富論』――ロックの論文が、精神哲学になしたことを、経済学に対してなした一労作――を出版した。この著作において経済学ははじめて、その最も完全な範囲において取扱われることになった。そして富の生産の基盤となる基本的諸原理が、あら探しや論駁の及ばないまでに、確立された。フランスのエコノミストに反対して、スミス博士は、労働が富の唯一の源泉であること、そしてわれわれの財産を増加し立身しょうとする欲望――母の胎内にあるときからわれわれと共にあり、墓場に入るまで決してわれわれから離れ去ることのない欲望――が、富を節約し蓄積する原因であること、を明らかにした。彼は、労働は製造業や商業に用いられる場合でも、土地の耕作に用いられる場合と同様に、よく富を生産するものであるということを明らかにした。彼は労働を最も生産的にする種々の手段を跡づけた。そして労働が種々の人々の間に分割されることによって、および蓄積された富、すなわち資本を産業的企業に使用することによって、労働力に対して加えられる巨大な附加についての最も見事な分析と説明とをあたえたのである。スミス博士はまた、彼の時代の商人、政治家、為政者が通常受け入れている見解に反対して、富は金銀の蓄富に存するのではなくて、人間生活の種々の必需品、便益品、享楽品の豊富にあることを明らかにした。彼は、個々人が各々自分自身のやり方で各自の利益を追求してゆくことが、あらゆる場合において正しい政策であること、そして、自分に有利な産業分野を追求してゆくことにおいて、彼らは必然的に、同時に社会にとっても有利な産業分野を追求しているのであること、を明らかにした。スミスは、申し分のないほど極めて詳細に、論理の筋道を通し、多くの例証を添えて、重商主義ないし排他主義は筋の通らないものであると同時に不条理なものであること、そして、産業を特定の

方向に強制したり、あるいは同じ国の異なった地方の間に、または、遠隔の・独立の国々の間に、行われるべき通商関係の種類を決定したりしようとするあらゆる規制は、真実の富裕と永続的繁栄との進行にとって、不得策であり有害であり――個々人の権利を傷つけるものであり――それに逆行するものであること、を明らかにした。彼はいう。「私人に対して彼らの資本をいかに使用すべきかを指図しようと試みる政治家は、それによって最も不必要な注意を自分に課するのみでなく、いかなる一個人にも、またいかなる枢密院または参議会にも安全には托しえない権力を僭するものである。そしてこの権力はどこにおいても、自分こそそれを行使するに適すると考えるほどの馬鹿さと厚顔さをもつ人の手中にあるときほど、危険なものはないのである」[1]と。

註(1)　第四編、第二章。邦訳(三)、五二頁。

しかし、多くの点においていかに優れていようとも、富の生産を取扱った『国富論』の部分においてさえ、誤り、しかもまた重大な誤りがあることは、なお否定することのできないところである。スミス博士が自らを、産業の自由から生ずる利益と、その自然的発展を拘束し束縛してきた抑制の有害な作用とについての説明に限定する限り、彼の原理と論証は、等しく正当で決定的である。しかし、それは他の場合においては、それほどでもない。スミスは、自分にとって最も有利なような産業分野を追求することにおいて、個々人は必然的に、同時に社会にとっても最も有利なような産業分野を追求することになるのである、とはいっていない。エコノミストの体系へのスミスの傾斜――彼の著作のあらゆる部門に認められる一つの傾斜――は、彼自身の体系の原理から余りに遠く彼をそらしていった。そのために彼は、個々人の利益は常に必ずしも、異なった職業のもつ社会的利益の真実の試金石ではないということを認めるにいたっている。スミスは、農業を唯一の生産的職業とは考えなかったけれども、いかなるものよりも最も生産的なものと考えた。そして彼は、国内商業が直接的外国商業よりもヨリ生産的であり、後者は仲継貿易よりもヨリ生産的である、と考えた。しかしながら、これらの区別がすべて根本的に誤っていることは明らかである。国家は個々人の集合体以上の何ものでもないのであるから、必然的に、個々人にとって個人的に最も有利なものは何でも、国家にとっても最も有利でなければならない、ということになる。そして、関係当事者の利己心は、もしも製造業や商業が農業と同じく大きな利潤をうみ、したがって同じように社会的に有利であるのでなければ、彼らが製造業や商業に従事するのを常に阻止するであろう、ということは明らかである。

スミス博士は、製造業者および商人の労働が生産的であることを明らかにすることにおいて、エコノミストの学説に極めて大きな改善を加えたのである。しかし、この重要な点に関するスミスの理論は、それにも拘らず、本質的には不完全であり、

欠点のあるものである。彼は生産的労働についてのその観念を「ある販売可能な財貨に固定され実現されている」労働に限定する。ところで、一切の労働は、もしそれが投入された社会の収入を減少することなく労働者に収入をあたえるならば、明らかに、生産的と考えられるべきである。事実、スミスが専らその注意を集中した物的生産物の量がいやしくも相当の量に増加することのできるのは、あるいは、社会が野蛮状態から脱却することができるのは、スミス博士が不生産的階級に組み入れた人々のなかのある人々の努力によってあたえられる安全と保護とによってだけである。

しかしながら私は、『国富論』の主要な欠点および『国富論』にしみこんでいる誤りのたいていものが生じてくる源泉は、財貨の価値と地代の騰貴ならびに増大とを決定する事情に関して、スミス博士が提出した誤った理論にある、と考えたい。彼は正当にも次のように述べている。すなわち、資本の蓄積と土地所有権の確立とに先立つ昔の時代においては、種々の財貨を生産するに要する労働量が、その交換価値の、または、相互に比較してのその相対的値打ちの、唯一の決定原理を形成していた、と。しかし彼は次のように考えてゆく。すなわち、資本が蓄積されて、労働者が他人の利益のために雇傭されはじめた後は、そして土地が占有されて地代が支払われはじめた後は、財貨の価値はもはやそれを生産し市場にもたらすに要する労働量にまるまる依存するというのではなくて、一部分はその事情にも依存するが、一部分は利潤、賃銀、地代の量に依存するようになる、そしてこれらの要素の何れか一つが不変であると仮定すると、財貨の価値は他のものの変化に従って――それらが騰貴すれば騰貴し、それらが下落すれば下落して――変化するであろう、と。しかしこの説明をおこなうにあたって、スミス博士は、この場合の変化は実際には、勤労の生産物すなわち財貨の分配上の変化以上の何ものでもなく、そして、かかるものとしてこの変化は、いかなる程度においても、財貨の価値、あるいは、相互に交換したり購買したりするその力や能力に影響をあたえることができないものである、と言うことを忘れたのである。Aは独立労働者によって生産された財貨であり、同じく独立労働者によって生産された財貨Bと自由に交換されるか、もしくは、それに値するものとする。いま、これらの財貨を生産する労働者が自ら資本家に雇傭され、彼らのために働くものとしよう。この変化はAとBとが相互に保っていた関係、すなわち、それらの価値に、少しの差異をも生ぜしめることができないことは明らかである。そして、これらの財貨を生産するために雇傭される労働者に支払われる賃銀は、一方において一日一シリングから五シリングに騰貴し、他方、五シリングから一シリングに下落することがあるかも知れないけれども、これらの財貨の価値は、依然全く不変であるということは、更に明らかなことである。種々の財貨に同じ比率の影響を及ぼすものはすべて、その財貨の相対価値を以前にあったと正確に同じにしてお

くに相違ない。それらの相互の比例、すなわち、その交換価値を変化させるためには、ある財貨が生産される事情のなかに、他の財貨には及ばない変化が生じなければならない。財貨がすべて等しく影響をうける限り、――そしてスミス博士自らも、一般的にいって、賃銀率および利潤率の変化は、財貨全部に正確に同じ程度に影響をあたえる、ということを示しているのであるが――財貨の価値が変化しうることは全くありえない。Aの価値はBの価値とは異なった比率において引き上げられるか引き下げられるかしなければならない。しかしながら、このことはこれらの財貨のうち何れか一方を生産するに要する労働量の変化によってのみ生じうるものであることは、明らかである。何故なら、次の点、すなわち、賃銀率もしくはAとBとを生産する労働に支払われる価格に生ずるような変化は必ず、AとB、更にはAとBのみならず一切の他の財貨に同じ率において影響を及ぼすに相違なく、[1] したがって、その相互の比例ないしその価値において、少したりとも変化とか変更とかを生ぜしめうるものでないということ、は繰返し論証されたところであるからである。

註(1)　ここでは、この原理を例証するために、財貨の生産に用いられる資本はその耐久性が等しい、もしくは、それらの資本の回収期間は等しいものと想定されている。私は後に、資本の耐久性の差異が、その働きによって生産された財貨の価値に及ぼす影響を指摘するであろう。

それ故に、スミス博士がその著作全体を通じて考えていることとは異なって、財貨の生産に要する労働の価格ないしそれに支払われる賃銀率における変化が、その価値に及ぼす影響は、かかる労働量における変化の影響と同じである、ということは真実ではない。そうではなくて、それは明白に、完全に異なったものである。ある特定の財貨の生産に要する労働量は、他の財貨の生産に要する労働量と比較して変化することがありうる。そしてかかる変化のある毎に、勿論、その相互の比例すなわち価値の変化が生ずるに相違ない。しかし、勤労が自由で拘束されていないところではどこでも、賃銀率の変化は決して特定階級の労働者だけに限定されるものではなくて、等しくあらゆる階級に広がる。それ故に、賃銀率の変化は、いかなる程度においても、労働によって生産された財貨の間にまえもって存在していた比例すなわち財貨の価値を、修正または変更することのできるものではなくて、単に、財貨が労働者とその雇傭者との間に分配される比例の変化を生ぜしめうるにすぎないのである。

スミス博士が提唱した卓越した原理についてのこの簡単な素描のなかにおいてさえも、彼が穀物は平均して、あらゆる財貨のなかでその価値が最も変化しないものであるということを証明しようと努力してきたことについても、また一言する価値があろう。彼のこの見解は主として次の仮定に基づいている。すなわち、穀物が主要な食料品目である限り、消費者の数は穀物

数量の変化に比例して増減するであろう。そして、「同じ土地と気候において等量の穀物を生産するには、平均して、殆んど等量の労働を、あるいは同じことになるのであるが、殆んど等量の価格を要するであろう」[1]（第一編第十一章）と。私は別の機会に、この理論の誤謬を示すであろう。しかし、一見してそれが全く支持しがたいことは明白である。穀物は確かに労働者の生活資料の主要部分であるけれども、その全生活資料を形成するものでは決してない。それ故に、穀物の豊富であるか稀少であるかが、それのみで、人口の増減を決定することはできない。そして、人口が僅かで、したがって、最高度に豊饒な土地しか耕作する必要のない場合には、穀物を生産するに要する労働量とそして勿論その穀物の価値とは、人口が比較的に稠密になり、したがってヨリ劣等の土地の耕作が必要となった場合におけるよりも、ヨリ小であるに相違ない、ということは、更に明白である。

註(1)　これは、スミス博士が一貫して、財貨の生産に要する労働量とその労働量に支払われる価格との間に存在すると考えている同一性を証明するためにうみだされたところの、多くの章句のなかの一つである。

土地の地代に関するスミス博士の見解は、一部分は正しく一部分は誤っている。彼の誤りは、彼が社会の種々な時期における原生産物の価値を決定する事情を、十分注意深く分析しなかったことに帰因しているように思われる。もし彼がそうしていたならば、彼が、食料を産出するすべての土地は、同時に地代を生ぜしめるに相違ない――これは一般的には正しいが――と主張した原理の代りに、彼は、ある国の進歩の初期の段階において、最上質の土地しか耕作されないときに、したがって、一定量の労働によって最大量の食料が獲得されるときには、いかなる地代も決して支払われないことを知ったであろう。そして彼はまた、地代を騰貴、増大させ、また地代の量を制限する事情のなかには、独占の性質を帯びた、そしておそらくは、彼が、限定された意味において、かつ特殊の条件の下において、地代がその原理に基づいて決定されると考えるのを正当化するような若干の事情はあるけれども、それにも拘らず確かに、地代を支払う原生産物の価格は、当然その地代を支払うことによって影響をうけないし、地代が全く放棄されたとしても、影響されないであろうということを知ったであろう。

財貨の価値と地代の性質および原因というような二つの重要な、根本的な点について、スミス博士がいだいていた見解の不正確の結果、彼の著作の他の部分に広がっている原理の多くのものが、必然的に傷われ不合理なものとなっている。これは特に、スミスが賃銀率および利潤率を決定する事情を研究する場合と、彼が種々な租税の究極の負担とその実際的作用とを跡づける場合とにあてはまる。実際、『国富論』の他のすべての部分におけると同様に、この部分においても、数多くの深遠な価値の高い見解と研究が豊富に存在しているわけであるが、それ

と同時に、そうした見解とそれらと混在している空論的学説との間を分離することが必要である。スミス博士のすべての原理を暗黙のうちに採用している人々は、絶えず変化して、正確に評価することが著しく困難な多くの事情を、注意深く分析し比較するということに依存している研究が、たった一人の努力によって完成されうるものであると考えているのである。しかしながら、これは実際は、事物の性質上全く不可能なことを想定しているのである。そのように多くの考察を含む科学が完成されうるのは、ただ徐々に、経験と観察によって次ぎ次ぎと見出されてくる知識と、最も天才的な人々の忍耐強い持続的な研究によってのみである。

『国富論』の発行以前においては、殆んど一般的に、財貨の価格はその稀少か豊富かの程度に、あるいは、ヨリ通俗的に表現されているように、その供給の需要に対する割合いに依存するものであると、考えられていた。ところで、スミス博士は次のことを明らかにしたのである。すなわち、その生産には競争が制約されずに作用することが認められ、その供給が無限に増加することのできるような財貨を取上げる場合、この原理は極めて限定された期間しか妥当するものではなく、そして、もっと期間を延長して考察する場合には、かかる財貨の平均的市場価格は、その平均的必要価格ないしその生産費に一致するものである、と。そしてスミスは、財貨の自然価格ないし必要価格に組入れられ、それを形成する要素の評価にあたって誤りをおかしたけれども、彼が自然価格と市場価格との一般的同一性を示し、そして時折り両者の間に生ずる分離が、訂正されてゆく仕方を明らかにした議論は、そういった事情に影響されないで、天才的であると同時に決定的なものである。

『国富論』のなかの最も価値高い諸章のうちのいくつかのものは、スミス博士が、その資本を種々の仕事に投下した人々によってつくられる利潤の間に、および種々の仕事に雇傭されている労働者に支払われる賃銀の間に、存在する差異は、真実の差異ではなくて外見上の差異にすぎないことを明らかにした諸章である。彼は、これらの差異は全く夫々の仕事と結びついている特殊の事情に依存しているものであること、そしてそれらの事情を斟酌し、かつ、それらの事情をすべて同じ共通の標準にまで整理する場合には、利潤率ならびに賃銀率はそれらすべての仕事において、夫々同じであるか極めて同一に近いものであろう、ということを明らかにした。特定の仕事における高い利潤率は、それに投下される資本がさらされる特別の危険によってか、あるいは、その仕事と結びついているその他のある不利な事情によって生ずるものである。ところで他方、低い利潤率は、資本が普通以上に安全であることによってか、あるいはある他の有利な事情によって生ずるのである。賃銀についても事情は同じである。すなわち、賃銀が通常以上に高いときには、それはなされる労働のヨリ強度なことによってか、あるいはその仕事の不健康、不快、ないし不安定なことか

ら生ずるのである。そして賃銀の通常以下の低さは、それと反対の享受――なされる仕事の軽度、またはその健康性、快適性、安定性から生ずるものである。スミス博士が、これらの問題と結びついている種々の論題の分析において示した手際のよさと巧みさには、何ものもこれを凌駕することはできない。そして種々の仕事に従事している資本家が獲得する利潤および労働者に支払われる賃銀が夫々均等になるという原理、あるいはむしろ均等に絶えず向わんとする傾向をもつという原理は、以前にも他の人々によって指摘されたところであったけれども、われわれはそのことについての論証と、そして何故、特定部門の産業における利潤率および特定の事業や職業に雇傭される人々の獲得する賃銀が、他の部門で獲得される利潤と賃銀と著しく差異があるにも拘らず、資本をも、労働者をも一方から他方へ何ら移動させることがないのかというその原因についての十分な、満足のゆく説明とを、スミスにおっているのである。

スミス博士が採用した排列順序は、混乱したものであり非論理的であると述べられてきている。そしてこの非難は、かなりの程度、根拠のあることが認められなければならない。研究の糸はたびたび、ある従属的な論題についての枝葉の議論に入りこんでゆくために中断されている。しかし、これらの枝葉の議論はそれが取扱われている章の主要研究課題と殆んど何らの関係をもたないことがしばしばあるけれども、それらは、一様に、道徳科学および政治学の全範囲にわたっての、若干の最も重要な点に向けられているものである。それらの論題は、明らかに著者の得意のものである。スミスはこれらの論題の取扱いにおいて、彼の精神の顕著な、特有の特徴たるその包括性と叡智とをすべて発揮している。それ故に、これらの枝葉の議論は必ずしも常に最もよい最も自然な仕方で導きいれられているものでないことは承認されなければならないけれども、それにも拘らず、それらはこの著作の価値を大いに増加するものである。そして、それはこの著作を有益たらしめると同じく興味あるものとすることによって、更には、もしこの著作がそれほど傍系的な論議と例証とをもたない、より科学的な、論理的に配列された論文であるならば研究したいという気持をもたないであろうと思われる人々に対して、それをすすめることによって、その読者数を大いに増加させたのである。

スミス博士は、分業が勤労の生産性に及ぼす驚くべき効果についての叙述からはじめ、次いで、財貨の直実価格と名目（貨幣）価格とを決定する諸事情、および、賃銀率、資本の利潤、土地の地代を決定する法則の究明に進んでゆく。これらの題目は第一編と第二編において論議される。この両編は実に、富の生産と分配とに関するスミスの理論に厳密に属するものすべてを含んでいる。第三編は、自由な抑制のない競争の原理が、作用するにまかせられた場合における諸国家の産業の自然的進歩について、および、種々のヨーロッパ諸国の政策において、現実に存在する事物の秩序を生ぜしめるに力のあった享受につい

て、一部分は歴史的事実に基づき、一部分は蓋然性だけに基づいて、究明することで占められている。そして彼は、この現実の秩序は、いかなる理論的見解の、または政治家の結合力の結果であったのでもなくて、諸国家がおかれていた特殊の事情と、特定の階級身分の人々が自己の利益を増大しようとする努力との必然的結果であったことを明らかにしようとつとめている。第四編は主として論争的性格のものである。そしてそれは、フランスのエコノミストの学説の検討の外に、重商主義ないし排他主義の原理と実践的帰結とについての十分な、最も巧妙な説明と、その論駁とを含んでいる。第五にして最後の編の前半は、国家収入が費消される、もしくは費消さるべき主要対象に関する一連の研究からなっている。しかし、これらの研究は、一般的にいって優れているものではあるが、明らかに、固有の意味において経済学と呼ばれるものによりも、ヨリ政治学に属するものである。第五編の後半では、スミスは租税の原理と国債が社会の福祉に及ぼす影響とを研究している。

『国富論』の叙述ぶりは、一般的にいえば、十分に明快で鮮明である。時として定義ならびに厳密に科学的な部分において、正確さと明確さが著しく欠けていることのあるのは、否定することができないけれども。『国富論』に展開されている諸理論の真の展望と傾向とは、個々の章句から、いな個々の章からすらも確かめらるべきものではない。それは『国富論』全体を注意深く研究し比較検討した人々によってしか、正しく理解され評価されることはできない。

独創性ということに対するスミス博士の資格については、可なりの意見の相違があった。そして、既にふれてきた『国富論』に先立って出版された種々の著者の労作からの抜萃からして、スミスの最も重要な理論のうちのあるものは、明瞭な叙述で先ぶれされており、スミスの理論すべてについての明確な跡づけが、スミス以前の著作家のなかに見出されうるものであることは明らかである。しかしながら私はなお、以上の事柄が、何らかの程度において、あるいは、極めて軽微な程度であるとしても、まさしくスミス博士の真の功績を減少せしめうるものであるとは考えない。スミスは他の人々の発見を採用する場合には、それを自分自身のものとしている。彼は彼の先行者達が、たいていの場合に偶然のことで挫づいてしまった原理が真理であることを論証した。彼はその真理を、以前にはそれを蔽っていた誤りから引き離した。彼はその真理の遠き結果を跡づけその限界を指摘した。その実践的重要性と真実の価値――その相互依存関係――を明らかにした。そして彼は、それを一貫した、調和的な、美しい体系にまとめあげたのである。

もし私がいま敢えて試みてきた考察が、十分根拠のあるものであるならば、『国富論』の研究にあたって、われわれが適度の懐疑主義を用いるべきこと、そして著者の才能に対するわれわれの賞讃あるいは著者に当然帰せらるべき名声に押されて、われわれが盲目的に彼の跡を追うとか、あるいは、検討もせず

に彼の原理を採用するとかすべきでないことが、大いに必要であることが了解されるであろう。それは彼を模範として学ぶことでもないしまた彼の教えでもないであろう。何故なら、彼はいかなる場合においても、最も有名な人々への単なる敬意のために、自らを誤るものではなくて、終始一貫、彼が評論する機会をもった種々の理論や見解のために論じられたさまざまな議論を、忍耐強く卒直に検討し比較したからである。そして、この方法でスミスの著作を研究する人々は、その結果当然に、彼の理論と結論とのうちの若干のものを排除してゆくことになるけれども、極めて広範な困難な研究分野に属する殆んどすべての論題をはじめて検討するにあたって、あれほど多くの興味のある重要な原理を見出して確立し、それを極めて有益な見事な著作に発展させたその人に対する最高度の賞讃を正しいと考えると共に、なお自分の勤労に対して十分のものが報いられるであろう。

第三節　『国富論の』発行以後における経済学の進歩

一七九八年に発行されたマルサス氏の『人口論』は、『国富論』の発行以後になされた経済学に対する最初の大きな貢献であった。いずれの国の人口も、その生活手段の水準まで増加してゆくのみならず、それをも超えて増加してゆこうとする自然的傾向をもつものであるという事実は、それ以前の著作家によってしばしば論ぜられていたところであり、なかんずく、ジェイムズ・ステュアート卿と、一七八六年に発行された『救貧法論』において故タウンゼント氏によって、極めて強力に説明されているものであった。しかし、人口の原理の最初の発見者ではなかったけれども、確かにマルサス氏は、人口の原理を堅固な基礎の上に樹立し、そして社会の本質的な関心事と結びついている殆んどすべての重大問題、特に賃銀率と貧民の状態とを支配する原因に関する問題を、正しく理解する上に、人口論の及ぼす甚大な影響を明らかにした最初の人であった。彼は種々の国々およびあらゆる段階の社会における人口の状態を広範に注意深く検討することによって、生活手段の増大は、貧民の数の真の、恒久的な、有益な増加についての唯一の確実な基準であるということ・人口が生活資料の水準以下に減少する危険は少しもないどころか、危険はすべてそれと反対の側にあるということ・一般的にいえば、生活手段と比較してみると、人口の不足が存在する代りに、あらゆる国においては、その過剰が存在するということ・そしてもし人口が道徳的抑制とか、あるいは結婚の形成にあたっての適度の慎慮とかがゆきわたることによって、この自然的水準にまで押しさげられることがなければ、人口は必ず悪徳、欠乏、悲惨の流布によってそこまで押しさげられるであろうということ、を論証したのである。

最も遠い古代からわれわれの時代にいたるまで、早期の結婚を奨励し、最も数多く子供を育てた人々に報賞をあたえること

によって、人口に対して人為的刺戟をあたえることが、立法家のいつに変らぬ政策であった。しかし、マルサス氏の理論は、自然的人口増加への一切のこうした干渉の有害な性質を明らかにする。彼の理論は次の点を明らかにしている。すなわち、人為的方策によって生じ、そしてそれに相応ずる生活手段の増加が前以って生じてもおらず、あるいはそれを伴いもしないあらゆる人口数の増加は、悲惨とか、あるいは死亡率の増大とかを生ぜしめうるにすぎないということ・――人間をこの世に産み出すことは決して困難なことではなくて、生存する人口に食料、衣服をあたえ教育することが困難であるということ・――人類はどこにおいても、その更なる増加が、生活資料を準備することの困難と社会のある部分の貧困とによって抑制されるまでは、その数を増加してゆくものであるということ・――したがって、増加の原理を強化しようと試みる代りに、われわれは常にそれを統御し抑制しようと努力すべきであるということ、これである。

社会の福祉と幸福とが主として、常に、増加の原理が分別のある統御と規制とに服する程度に依存するに相違ないということに対して、最も懐疑的な人々を納得させるためには、数言を必要とするにすぎないであろう。経済学の原理を少しも知らない人々ですら、賃銀の市場率は、専ら、一国の資本すなわち労働を雇傭する手段が、労働者数に対してもつ割合いに依存するものであることを知っている。それ故に、社会の大部分すなわち労働階級の状態を真実に有効に改善する方法は、明らかに一つしかない。すなわち、人口に対する資本の比率を増加することによってである。もしこの比率が増加するならば、賃銀率はそれに比例して増加されてゆき、そして労働者は社会的地位において高まってゆくであろう。しかし、もしこの比率が増加しないならば、もし人口に対する資本の比例が同じであり続けるならば、労働者の状態には変化は生じないであろう。そしてもしこの比率が減少するならば、賃銀はそれに比例して悪くなり、したがって労働者の状態は悪化してゆくであろう。不幸にして、下層階級は一国の資本を増減する力などは殆んど全くもっているものではないが、しかし、彼らは労働の供給の増減については全能である。そこで、もし彼らがこの力を利用するに十分な良識と先見の明をもちさえすれば、彼らは市場に労働を不足させることによって、労働者の奉仕に対する需要がたまたま減少することがあるにも拘らず、その賃銀を高めるであろう。他方、もし彼らがこの力を利用しないで、その自然的傾向を発揮しようとする人口の原理が、市場に労働を過剰にするにまかせるならば、労働に対する需要がどれほど増加しても、賃銀は低下するであろう。それ故に、労働階級は極めて大きな程度において、自己自身の運命の決定者であることが明らかである。他の人々が彼らのためになしうることは、マルサス氏の言葉を使用するならば、実際には、労働階級が自分でなしうるところに比較すれば、その秤に加えられた塵のようなものにすぎ

ないのである。また、労働者が賃銀率を知るようになり、そして彼ら自身が、生活の必需品および安楽品に対する彼らの支配を実質的に注入することのできる唯一の手段の持主であるという重要な、明白な真理を心からの確信をもって印象づけられるまでは、彼らの状態がいやしくも実質的に改善されるであろうなどと考える何らの重大な理由もないのである。

以上の説明は、いきおい極めて簡単で不完全ではあったけれども、しかも『人口論』の原理と結論が、人類の幸福にとって不利なものであると論じている人々の提唱する見解の誤謬を示すのに十分であろう。マルサス氏を極めて根気強く攻撃してきた無知な悪口は、悪口する本人達にとっては恥ずべきものであったけれども、ヨリ正しい見解の採用を阻止することには、少しの影響をも及ぼすことはできなかった。そして経済学の基本原理がもっと一般的に流布すれば、次のことを期待する十分な根拠をあたえるであろう。すなわち、この課題についてあれほど熱心に宣伝されていた偏見と誤解とがその影響力の多くを失うであろうと思われる時期が・そして諸国家の力と繁栄とが評価されるべきであるのは、その人民の状態によって――彼らが人間生活の必需品、享楽品を支配する大いさによって――であって、その国民の数によってではなく、そして支配の大いさは主として、市場に労働を供給するにあたって示される慎慮と分別に依存するに相違ないということが一般的に認められるであろうと思われる時期が、そう遠いものではないということ、これである。[1]

註(1)　これらの考察は、亭ら、マルサス氏が弁護した人口に関する理論に向けられたものであって、彼が支持をあたえているその経済学体系について、何らかでもの是認を云い表わそうとするものではない。

パリのジェ・ベ・セェ氏の『経済学』は、その初版は一八〇二年にあらわれたのであるが、もし、スミス博士の原理についての十分消化された啓発的な彼の説明が、大陸における経済学の進歩を促進することにおいて及ぼした影響そのものだけに対するものであるとしてすらも、それは経済学の進歩についての素描において、敬意をもって言及される価値があるであろう。しかし明快な論理的な排列という功績とその多くの例証の巧みさとに加えて、「それは若干の正確な、独創的な、深遠な議論でもって内容を豊富にされている」[1]。これらのうちで、供給過剰についての真の性質と原因とについての説明が、決定的に最も重要で価値の高いものである。スミス博士は、生産力がいかにして最も効果的たらしめられるかということを明らかにした。そしてセェ氏は、この生産力がどのように増加しようとそれは決して一般的供給過剰、あるいは市場の全般的な過剰を生ぜしめうるものでないことを示すことによって、その理論を完成した。――時としてある一つの財貨が余りにも多く、生産されることがあるかも知れない。しかし、あらゆる種類の財貨の供給が余りにも多すぎうるということは、全くありえないことである。あら

ゆる過剰に対しては、それに対応する不足が存在しなければならない。あらゆる面からして、生産力がどれほど増大しようとも、交換の媒介なしに、その生産者が直接に消費する目的でもって生産するような財貨は、決して過剰たりえないことが認められる。何故なら、それらの財貨が過剰であることがあると考えることは、実際には動機なしの生産――原因なしの結果――を考えることであろう！　からである。財貨が過剰たりうるのは、それが市場にもたらされ、他の財貨と交換に提供される場合のみである。ところで、市場にもたらされるような財貨は、それと交換に他の財貨を獲得しようとする目的でのみ生産されるものである。そこで、何らかの種類の財貨が過剰であるという事実は、それが交換ないし購買しようとする財貨の供給の側に、それに対応する不足があることの当然の証拠である。販売のために生産物を提供する人々は、彼らがその生産物のために円滑な市場を見出すときには、すなわち、彼らがその生産物を獲得したいと思うような他の生産物と容易に交換することができるときには、生産に向って刺戟をうける。そしてこのことから、真正の、唯一の有効な勤労の奨励は、以前考えられていたような、不生産的、浪費的支出の増加にあるのではなくて、生産の増加にあることは、明らかである。あらゆる新財貨は、必然的に、ある他の財貨に対する新しい等価、ないし新しい購買手段を形成するものである。単なる需要の存在は、それがいかに強烈なものであるとしても、それだけでは、生産を奨励する手段となることはできないということが、忘れられてはならない。真の需要者となるためには、人は、彼が所有したいと思う財貨を購入する意思をもたなければならないのみでなく、またその力をもたなければならない。あるいは、換言すれば、彼はそれに対して等価を提供することができなければならないのである。ところで、技術と勤労との生産物を所有したいというわれわれの欲望に、いやしくも何らかの限界がありうるということは、かって存在しなかったし、それは事物の性質に合するものでもない。――

クロエスス王の富も、ペルシヤの権勢も、魂に十分な満足を与えるものではない。

真実の、唯一つの必要事は、われわれの欲望を有効ならしめる、あるいは、われわれが獲得したいと欲する財貨と交換に他の産物を提供する、力である。そこで、この力が増大すればするほど、――すなわち、各人が勤勉になればなるほど、他人の生産物に対する等価物を提供できる彼の手段は、それだけヨリ増加し、市場はそれだけヨリ広範になるであろう。それ故に、供給過剰は総体として生産物が余りにも多すぎることに発することはありえないことであって、それはあらゆる場合において、生産力の誤った適用の――われわれがそれを交換しようとする人々の趣味に合わないか、あるいは、われわれが消費することのできないところの、特種の財貨の生産の結果であることは明らかである。もしわれわれが次の二つの大きな要請に注意する

ならば、――もしわれわれがそれを販売するために提供する相手の人々によって受取られうるような財貨、あるいは、われわれ自身の使用に直接に役立つような財貨のみを生産するならば、われわれは生産力を一〇倍にも一〇〇倍にも増大することができ、しかも、われわれは、生産力をそれと同じ比例で減少した場合と同じように、一切の過剰から全く免れるであろう。誤算と投機に対する余りに激しい熱烈さとが、時として資本を、それが流れるべきではない方向にそらすことがあるかも知れない。しかし、もし政府が関係当事者を彼らの浅慮の結果から救出しようなどと干渉しないならば、自分の利益に対する考慮から、彼らは自分達が従事してきた損のゆく仕事から身をひき、かくて、いかなる人為的救済策よりもヨリ速かに、資本の不適当な分配を是正し、財貨の価格とその生産費との間に自然的均衡を再現するであろう。それ故に、不生産的出費は市場の過剰を防止するためには必要でない。そして、不生産的出費は他の何らかの方向において、国富の増大に貢献するものであると主張することは、実際には、富はその一部分を海中か火中に投ずることによって増大するであろうと主張するのと全く同じことなのである！。

註(1)　リカァドォ氏の『経済学原理』序言。

セェ氏がこのようにフランスにおいて、経済学を成功裡に研究しつつある間に、一方、それはイギリスにおいても日ましにその重要性が高まり、あらたな帰依者を獲得しつつあった。最近の戦争によって、国家経済のあらゆる分野に生じた異常な変化は、必ずそうするものであるが、あらゆる階級の利害関係に深い影響を及ぼして、最も熱心な、一般的な関心を生ぜしめた。以前の数世紀の経験がこの三十年の短い期間に詰めこまれた。そして諸事情の新たな結合関係は、現存の諸理論を試みる試金石として役立ったのみならず、ヨリ劣った著作家すらも、そのことによって経済学の境界を拡大し、新しい真理の発見者となることができたものである。次のようにいっても云いすぎではなかろう。すなわち、イングランド銀行による現金支払制限条例とその結果たる通貨の減価とから発生した議論は、貨幣論を完成するものであったし、穀物貿易制限政策と最近の平和に続いて生じた価格の暴落の原因に関する議論とに刺戟をうけて、この国にうまれて、原生産物の価格、土地の地代および利潤率、を規制する法則を研究せんとする最も有能な人々のうちのあるものは、多くの重要な原理を引きだしたし、そして確かに『国富論』に対する関心に比較すれば劣るけれども、重要性においてはそれと比肩し、深さと独創性においてはおそらく優れていると思われる一著作があらわれるにいたったのである、と。

社会の種々の階級の間への富の分配を規制する法則についての研究が、成功的に踏み出された可なり大きな最初の歩みは、一八一五年になされた。この年に、地代の真実の性質、起源ならびに原因が、最初に、「オックスフォード大学の一フェロー[1]」

とマルサス[2]氏とによって殆んど同時に出版された大きな功績をもつ二つのパンフレットによって説明されたのである。しかしこれらの紳士の研究は、極めて重要なものではあるけれども、その対象が比較的に限定されたものであった。そこでその研究を経済学のあらゆる分野にまで及ぼすこと、最高の権威者によってさえも是認されていた誤りを正すこと、従来発見されることのなかった多くの原理および最も重要な原理を明らかにし、確立することが、リカァドォ氏に残されていた。一八一七年に『経済学および課税の原理』に関する彼の著作があらわれたことは、経済学の歴史において新しい特筆大書すべき時代を形成するものであった。多くの賞讃すべきそれと関連ある議論は別として、リカァドォ氏はそこにおいて、財貨の交換価値を決定する原理を分析し、富の分配の科学についてその十全な視野をあたえたのである。これらの研究のなかに示されているその精神力――最も深遠な難解な問題を解明してゆくその手法――一般的に確定されている原理の作用を究明してゆくその聡明さ――それらの原理を第二次的な偶然的な性質をもつような原理から分離し解きほぐしてゆくその熟練――そしてその最も遠い結果を認め評価するその洞察力、は決して他に凌駕されるものではなかった。そして、社会の複雑な機構を開示し経済学を完成せしめるために、最も多く貢献した人々の名簿のなかで、リカァドォの名を永久に、高く顕著な位置に置くものであろう。

註(1)　オックスフォード大学の一フェロー（弁護士たるウェスト氏）による『土地に対する資本投下論』。

註(2)　トーマス・ロバート・マルサス師による『地代の性質と増加についての研究』。

リカァドォ氏は、スミス博士が、財貨を生産するに要する労働量の増減から生ずる結果は、賃銀ないしその労働に支払われる価格の増加から生ずる結果と同じであると考えることにおいて、陥いった誤りに気付いた最初の人である。リカァドォは次のことを明らかにした。すなわち、利潤率あるいは賃銀率の変化は、あらゆる種類の非独占的財貨に対して、同じ程度ないし殆んど同じ程度に影響を及ぼす限りは、その変化は財貨の交換価値に何らの影響をも及ばさないか、あるいは、何らかの影響を及ぼすとしても、それは、当該の変化が時として他のものに対する以上にあるものに多く影響を及ぼすことのあるその程度に依存するであろう、と。そしてウェスト氏とマルサス氏が、地代は原生産物の価格のなかに入りこむものではないし、したがっていかなる財貨の価格のなかにも入りこむものでないことを明らかにしたのであるから、必然的に、自由に生産される財貨の価値はすべて、最も未開の最も貧弱な社会においてと同様に、高度に文明化し洗錬された社会においても、財貨を生産しそれを市場にもたらすに要する労働量に、全く依存するものである、ということになる。

この根本原理が確立されると、労働の雇傭者は賃銀の騰貴を、財貨の価値ないし価格を騰貴せしめることによって償うこ

とはできないのであるから、勤労の生産物のうち、さもなければ雇傭者に帰属するであろうと思われる割合いないし全体の分け前は、賃銀が減少（騰貴?…訳者）せしめられる量だけ、その総体量において減少しなければならないことは、明らかである。しかしながら、リカァドォ氏が述べているように、利潤率は、必ず、賃銀が増加すると同じ比例で減少するということは、真実ではない。何故なら、利潤とは、資本ないし資本のうち産業的企業において消費されたような部分が償却された後に、資本をその企業に用いた人に生じてくる剰余生産物ないし剰余生産物の価値を意味するのであるし、利潤率とは、常に用いられた資本の分数において評価されるものであり、そして事実、単に利潤全体が資本全体に対してもつ割合いをいい表したものにすぎないからである。そしてこの点から、勤労の生産性が増加する場合にはいつでも、その賃銀として労働者に割り当てられる生産物の数量も、また、その雇傭者に残る数量すなわち利潤率を何ら減少させることなく増大しうることが、明らかとなるのである。

賃銀率の変化が利潤率に及ぼす極めて大きな影響を示しておいて、リカァドォ氏は、賃銀を決定する事情を発見することに身をいれてゆく。リカァドォは、この事情が主として、労働者の消費に要する財貨の生産費に依存するのを見出した。かかる財貨の価格がいかに高く騰貴しようと、労働者は常に、自己の生存を可能ならしめ、その種族を維持せしめるに十分なだけの生活資料を受取らなければならないことは明らかである。そして、原産物は常に労働者の生活資料の主要部分を形成するに相違ないものであるから、そしてその価格は、社会の進歩につれて用いなければならない土地の収益が不断に減少してゆくという理由で、騰貴せんとする恒常的傾向をもつものであるから、[1] 資本家と労働者の間に分割される勤労の生産物数量が、減少せんとする自然的傾向をもつ限り、労働者の分け前になるその生産物の割合いは、増加せんとする自然的傾向をもつ、ということになる。そこで、利潤率は、その生産物のうち、労働者にあたえられなければならない分け前の増大によってと同様に、一定量の労働の行使によって獲得される生産物の絶対的数量の減少によっても、減少するに相違ないものである。かかる利潤の低下は、社会の進歩してゆくときに必ず生ずるものであるということは、何らの疑問もないし、またありえない事実である。しかしながら、一般的には、この利潤の低下は資本の増加の、あるいはむしろ資本の所有者の競争の増大の、すなわち相互に相手方より安価に販売しようとする彼らの努力の結果である、と考えられてきた。しかるに、リカァドォ氏はこの見解の誤謬を明らかにしたのである。そしてそれ以来、利潤率の永続的低下はすべて、(1)賃銀率の増大か、あるいは、(2)人口の増加につれて次ぎ次ぎに耕作されるヨリ劣等の土地で原生産物を産出する困難の増大によって惹き起される勤労の生産性の減少の、あるいは、(3)産業的企業に従事する人々に影響するような租税ないし

公共の負担の増大の、いずれかの結果であるということが、十分確立されたのである。

註(1)　あらゆる前進的社会が、頼らなければならない土地の生産性の減少によって惹き起された、原生産物の価格の騰貴は、そこに、多くの空想的な誤った見解と混在して、正当な独創的な見解が多く存在するところの、一七六六年に十二折り版二巻で出版された『全統治の原理』と題する一著作においてはじめて明白に示されたところであると、私は信じている。ある一つの場合に著者は地代の真の源泉に思いいたっている。――「耕作者が多くなれば、良質の土地はすべて耕作されることになる。そこで引続いての耕作人数の増加によって、および開墾の継続によって、ヨリ劣等の新しい土地を開墾するよりは、新しい小作人をして豊饒な土地を小作させる方がはるかに有利である一定の限界点に達するわけである」――（第一巻、一二六頁）。

しかしながら、彼が自分がのべた原理の重要性に少しも気付いていないことは、彼がこの問題に立ち戻って論じていないことから明白である。そして事実、この著作の他の章句から、彼は地代は価格に入りこむものと考えていたことは明らかである。

自己の特有の理論を確立するにあたって、リカァドォ氏は、多くの有益な一般的に興味のある真理に対して極めて多くのものを附け加えたのみならず、識別ある分析と深遠な洗練された議論を含んだ若干の最もすぐれた例を示したのである。彼の理論はと、時していわれていたように、単なる思弁的なものではない。逆に、彼の理論は、経済学の殆んどすべての研究に深く入りこんでいる。リカァドォの著作のなかで、租税が地代、利潤、賃銀、原生産物に及ぼす真の負担と結果とを見出すために、彼が自己の原理を適用した部分は、全く実践的である。そしてそれは常に、経済学のこの重大な分野を完全に熟知しようと欲する人々にとって、注意深い研究課題でなければならない。

追　記　私は、マカロックの本書を訳出するにあたって、この貴重な図書の利用を許して下さった京都大学の岸本誠二郎教授に、深い感謝をささげるものである。